

第3章 丘珠縄文遺跡の概要

1 札幌の縄文遺跡

札幌市は、北海道の中央部と西南部とを地形的に隔てる低地帯（石狩低地）の日本海側に位置し、南北 45.4km、東西 42.3km、面積 1,121.12km²の広さを有しています。札幌市内の地形は多様で、中心市街地は豊平川や発寒川により形成された扇状地上に広がり、北西～南西部は山地で、東部には丘陵地や台地が続きます。一方、北部には沖積平野（石狩平野）が広がり、その北西側の発寒川沿いには、紅葉山砂丘とよばれる古砂丘が南西から北東方向に延びています。

このように多様な地形を有する札幌市内では、これまでの調査で 500 カ所以上の遺跡が発見されています。そのうち 264 カ所の遺跡で、縄文文化の早期から晩期にかけての遺構や遺物が発見されています。これらの縄文遺跡は、比較的標高の高い東部の台地や丘陵地に最も多く分布し、次いで、その北西側に広がる札幌扇状地や発寒川扇状地に多くみられます。一方、北部に広がる沖積平野では、やや標高の高い紅葉山砂丘を除き、縄文文化の遺跡は数カ所しか発見されていません。

時期的な移り変わりをみると、縄文早期には東部の台地や丘陵地でのみ遺跡がみられ、次の縄文前期になると発寒川扇状地にも遺跡が残されるようになります。縄文前期は、縄文早期の頃はじめた地球規模の温暖化現象の最盛期にあたり、海面が上昇して内陸部まで海水が入り込んだことが知られています（縄文海進^{※7}）。市内でも北部に内湾が成立し、内湾と外海を隔てる紅葉山砂丘も、この頃より形成されたものと考えられています。この時期には、日本各地で貝塚が形成されますが、今のところ札幌市内では見つかっていません。

次の縄文中期になると、全国的な傾向と同様に、札幌市内でも遺跡数が増加し、東部の台地・丘陵地や発寒川扇状地に加え、標高 5m前後の紅葉山砂丘まで活動の領域が広がっていきます。さらに、縄文中期後半から後期になると、それまでほとんど遺跡が残されることのなかった札幌扇状地や沖積平野の低地部にも、少数ながら遺跡が残されるようになります。この傾向は縄文晩期にも引き継がれ、次の続縄文文化へと続いていきました。

※7) 約 8000～6000 年前頃に、日本近海で現在に比べて海面が 2～3m高くなり、日本各地で海水が陸地奥深くに浸入した現象。

第1表 さとらんの遺跡年表

おもなできごと (日本列島)	本州の時代区分	年代	北海道の時代区分 [※]	おもなできごと (北海道)			
檜の使用がはじまる 土器の使用がはじまる 竪穴住居がはじまる 弓矢の使用がはじまる 土偶がはじまる 気候の温暖化 縄文海進 大規模な貝塚が形成される 東日本に亀ヶ岡文化が広がる	旧石器文化 縄文文化 草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	20000年前	旧石器文化 縄文文化 草創期 早期 前期 中期 後期 晩期	北海道に人が住みはじめる 細石刃文化が広がる			
		16000～15000年前		北海道で土器の使用がはじまる			
		10000年前		竪穴住居がはじまる 石刃鏃文化が波及する 札幌北部の低地が内湾となる			
		7000年前		大規模な貝塚が形成される			
		5500年前					
		4500年前		紅葉山砂丘に人が住みはじめる			
		3000年前		ストーンサークルがはじまる 周堤墓がはじまる 亀ヶ岡文化の影響を受ける			
		2300年前		H508遺跡(丘珠縄文遺跡) H317遺跡(下層)			
		水稲耕作がはじまる 邪馬台国 前方後円墳がはじまる 仏教の伝来 大化の改新 平城京に都がうつされる 平安京に都がうつされる 鎌倉幕府がはじまる 室町幕府がはじまる 戦国時代 江戸幕府がはじまる		弥生文化	2300年前	続縄文文化 オホーツク文化 擦文文化 アイヌ文化期	H509遺跡 オホーツク海沿岸に北方系のオホーツク文化が広がる
				古墳文化	1300年前		カマド付の竪穴住居がはじまる 鉄製品が一般化する 穀類が普及する H317遺跡(上層)
飛鳥時代							
奈良時代	800年前		土器にかわり鉄鍋が普及する 平地式住居がはじまる				
平安時代			チャシが築造される				
鎌倉時代							
室町時代							
安土・桃山時代							
江戸時代							

※北海道の時代区分は、考古学における一般的な時代区分を示しています。

このような分布の移り変わりを示す市内の縄文文化の遺跡からは、当時の生活の拠点である竪穴住居、お墓や貯蔵穴、動物を狩るための落とし穴などが見つかっています。ただし、数十～数百軒の竪穴住居跡が残されるような、長期間にわたって繰り返し人々が生活したことを示す大規模なムラ（集落）の跡は、市内では見つかっていません。これまでの調査では、お墓と考えられる土坑が数十～数百基残された遺跡は見つっていますが、それ以外は数軒～十数軒の竪穴住居跡や数カ所～数十カ所の落とし穴が見つかる程度の、規模が小さな遺跡です。古くからの開発で、すでに破壊されてしまった可能性もありますが、小規模な遺跡が多いことも、札幌市内の縄文遺跡の特徴と言えます。

2 遺跡の位置と周辺環境

(1) 地理的環境

H508 遺跡（丘珠縄文遺跡）は、札幌市の北部に広がる沖積平野（石狩平野）に立地する縄文晩期の遺跡です。遺跡付近における現在の地表面の標高は 5m前後、縄文晩期の旧地表面の標高は 3m前後と、低い土地に残された遺跡です。

石狩平野は、縄文早期の後半から前期頃の「縄文海進」により内湾が形成されていたと考えられており、H508 遺跡の付近も、その頃は湾奥の環境だったと推定されます。その後、海水準がわずかに低下するとともに、河川からの土砂による埋積が進み、内湾域は徐々に平野となっていくます。蛇行する河川が氾濫を繰り返しながら土砂を堆積させることで、平野部に氾濫原が発達し、微高地（自然堤防）が形成されました。縄文晩期には、この平野部に人々が進出し、河川に沿った微高地を活動領域としました。こうして、H508 遺跡は形成されたものと考えられます。

遺跡の北東側に位置するモエレ沼は、「縄文海進」後の氾濫原を蛇行した河川の名残（三日月湖）です。最近の札幌市博物館活動センターによるボーリング調査の結果などから、この三日月湖は石狩川により形成されたと考えられています。すなわち、石狩川の本流ないし支流が、縄文晩期頃に、遺跡の近くを流れていた可能性があり、H508 遺跡がのる微高地の形成にも関わったものと推測されます。

(2) 歴史的環境

北海道には、25000年前頃には北東アジアや東アジアから人々^{※8}が渡来し、旧石器文化が広がります。その後、15000年前頃からはじまる気候の温暖化に伴い、北海道も本州と同じように、狩猟・漁撈・採集を生業とし竪穴住居で生活する縄文文化へと移り変わります。縄文文化のあと、本州では水稲耕作がはじまり弥生文化となりますが、北海道では稲作は広がらず、北海道の環境に適応した狩猟・漁撈・採集を中心とする続縄文文化に変わります。本州で奈良時代がはじまる頃、北海道では、土器のかたちや竪穴住居の作り方、鉄製品の製作や穀類の栽培等、本州の文化の影響を受けて、さつもんぶんか擦文文化がはじまります。本州で平安時代が終わり鎌倉時代になる頃、北海道では、土器が作られなくなり、擦文文化が終わります。これ以降の本州の中世から近世に相当する時期を、北海道ではアイヌ文化期^{※9}と呼び、この時期を通して、アイヌ文化^{※10}が形成されていったと考えられています。

江戸時代になると、文献記録の中にアイヌ文化期の札幌に関する記述が認められるようになります。アイヌ語に由来する「札幌」^{※11}の名称は、17世紀後半に弘前藩の関係者により記録された『つがるいっとうし津軽一統志』の中に、「さつほろ」として認められ、『かんぶんじゅうねんえびすほうきしゅうしよ寛文拾年狄蜂起集書』には、「さつほろ」(札幌)や「はつしやふ」(発寒)にコタンがあったことが記されています。

丘珠地区では、縄文文化のあと、H508遺跡に近接するH317遺跡の調査等で、続縄文文化初頭の炉跡や土器・石器、また、擦文文化のムラ(集落)の跡が見つかっています。アイヌ文化期の丘珠地区の様子については、今のところよくわかっていませんが、文献記録では、『津軽一統志』の中に「さつほろの枝川に縦横半里計の沼御座候由」との記載があり、丘珠地区の北東に位置するモエレ沼を指すものと考えられています。北海道の他の地域と同じように、「丘珠」^{※12}や「モエレ」^{※13}をはじめとしたアイヌ語に由来する地名があることから、丘珠周辺でも、アイヌの人々^{※14}が活動していたものと考えられます。

近世末になると、慶応2年(1866年)に、徳川幕府の命を受けた大友亀太郎が伏籠川のほとり(現在の東区北13条東16丁目付近)に入植し、「おてさくば御手作場」(模範農場)を開いて大友堀を開削するなど、丘珠地区のある東区では、明治時代以降の札幌の基礎が形づくられていきます。

大友亀太郎の入植にはじまる元村の北東に位置する丘珠地区は、明治3(1870)年の酒田県(現在の山形県の一部)からの入植にはじまり、明治4(1871)年に「丘珠村」という村号が定められ、明治35(1902)年には元村、苗穂村、雁来村とともに「札幌村」として統合されます。

第3章 丘珠縄文遺跡の概要

明治時代以降、牧草地、畑地、水田として土地利用がはかられ、大正時代を経て、札幌を代表するタマネギの優良産地となりました。また、昭和17(1942)年に旧日本軍により丘珠飛行場(現在の丘珠空港)が開設され、昭和30(1955)年には札幌市に合併、昭和47(1972)年に札幌市が政令指定都市となり東区が設置されると、農村地帯であった丘珠地区にも市街化の波が押し寄せ、宅地化が進行していきます。

平成に入ると、サッポロさとらんどやモエレ沼公園、丘珠空港周辺の緑地など、大規模な施設・公園・緑地が整備され、札幌の都市型農業の拠点として、また、みどり豊かな施設が集積する交流拠点として位置付けられています。現在の丘珠地区は、札幌駅を中心とした5~10km圏内に位置し、札幌の市街地に隣接して、農地や緑地、川辺など、平地のみどりが広がる自然豊かな地域です。

※8) 近年のミトコンドリア DNA 分析では、「北海道の縄文人が保持していたのは、より北方の沿海州の旧石器時代人につながると考えられる DNA」であり、日本列島への人類の渡来は「従来いわれてきた南方ルートだけではなく、多様なルートを想定する必要がある」とされています(篠田謙一・安達登 2010「DNA が語る「日本人への旅」の複眼的視点」『科学』vol.80 No.4 岩波書店)。

※9) 考古学では、北海道で擦文文化が終わったあと、本州の中世・近世に相当する時期を「アイヌ文化期」と呼んでいます。

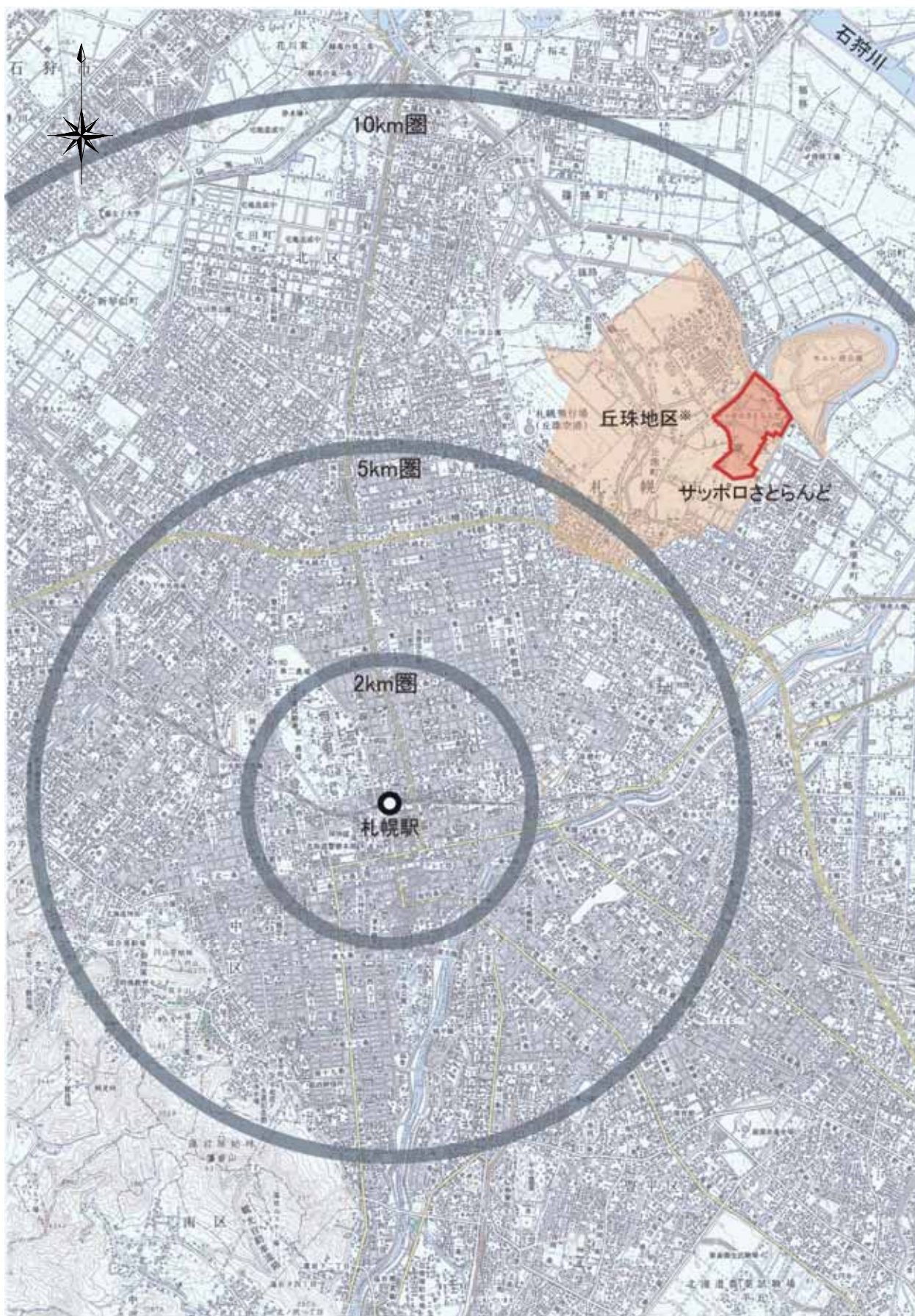
※10) 現在アイヌ文化として捉えられている文化は、「近世に松前藩や本州の役人・旅行家が残した記録や近代から現代にかけて行われた民族学的調査によって明らかになっている」文化であると考えられています。なお、「縄文文化・続縄文文化に後続する擦文文化からアイヌ文化への移行については、その担い手に大きな変化がないとの見解から、北海道の縄文時代・旧石器時代までもアイヌ文化とすればいいと主張する方も」いますが、「各文化期の内容の差は大きく、縄文土器を使用し、竪穴住居に住むアイヌ文化といった表現は、現在の『アイヌ文化』の概念とは大きくかけ離れてしま」います(長沼孝・越田賢一郎 2011「時代の概観」『I 考古学から見た北海道』『新版 北海道の歴史 上』北海道新聞社)。

※11) 諸説ありますが、松浦武四郎の記録にあるように、「サツ・ポロ・ペツ (sato-poro-pet 乾く・大きい・川) ぐらいに解するのが自然」(山田秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社)。

※12) 「オッカイ・タム・チャラパ。男の・刀を・落としたる所。川名。」(永田地名解)。

「この地名の前段の「オッカイタム」が和人に継承されて「丘珠」になったものらしい」(山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』楡書房)。

※13) 「モイレ・ペツというのは、川の曲がった処等で、ゆっくりと水が流れている川の事」。「モイレが普通で、モイレは訛音^{かおん}か、或いは方言」(山田秀三 1965『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』楡書房)。



※丘珠地区網掛け範囲: 丘珠連合町内会の区域

第2図 丘珠地区と「サッポロさとらんど」の位置

※14) アイヌの人々は、「日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であり、独自の言語や文化を育んできました」（札幌市 2010「第 1-1 アイヌ民族の先住民族としての歴史」『札幌市アイヌ施策推進計画』）。なお、形質人類学の研究では、「日本列島に住むようになった東南アジア系集団と、主として弥生時代以後に渡来した北アジア系集団との混合によって日本人集団が形成された」とする「二重構造モデル」に基づき、アイヌの人々は「縄文人の伝統を最も濃厚に受けついで人たち」だと考えられてきました（埴原和郎編 1994『日本人の起源〈増補〉』朝日選書）。一方で、最新の研究では、「北海道アイヌの祖先集団とオホーツク人は、これまで想定されていた以上に、活発な文化的・遺伝的交流を行っていたのではないか」との見解が提示されています（百々幸雄、川久保善智、澤田純明、石田肇 2013「頭蓋の形態小変異からみたアイヌとその隣人たち III. 隣接集団との親疎関係」『Anthropological Science Vol. 121(1)』日本人類学会）。また、最新の DNA 分析でも、北海道の「基層集団が歴史時代を通じてオホーツク文化人や本土の日本人との交流を経てアイヌ集団へと変貌していった経緯を読み取ることができる」と言われています（篠田謙一・安達登 2010「DNA が語る「日本人への旅」の複眼的視点」『科学』vol.80 No.4 岩波書店）。

3 サッポロさとらんどと周辺の文化施設

H508 遺跡が所在するサッポロさとらんどは、「人と農業・自然とのふれあい」、「都市と農業の共存」をテーマとする農業体験交流施設であり、市民が農業や自然とふれ親しみ、体験しながら憩い、楽しむことができる田園空間と本市の都市型農業を総合的に支援する拠点を一体的に創出することを目的とした施設です。

また、サッポロさとらんど周辺には、イサム・ノグチの設計によるモエレ沼公園をはじめとして、丘珠緑地、丘珠空港緑地、札幌コミュニティドーム「つどーむ」など、文化施設や緑地が多く整備されています。

この他に、昭和 49 年に本市の無形文化財第一号に指定された丘珠獅子舞は、毎年丘珠神社の例祭で奉納されています。

【札幌市農業体験交流施設サッポロさとらんど】

- ・所在地：東区丘珠町 584-2 ほか
- ・管理：指定管理者（平成 18 年度～）
- ・面積：約 102ha（施工済約 74.3ha）
- ・オープン：平成 7 年 7 月
- ・営業日：4/29～11/3（無休）、11/4～4/28（月曜日、年末年始休園）
- ・入園者数：653,220 人（平成 24 年度実績^{*15}）

- ・ 主要施設：さとらんどセンター、レストハウスみのりの家、レストハウスまきばの家、風のはらっぱ、市民農園、体験農園、ふれあい牧場、さとらんどガーデン、炊事広場、さとの池、パークゴルフ場、さとらんど交流館、ミルクの郷（サツラク農業協同組合管理）など
- ・ 駐車場：7カ所（1,800台収容）
- ・ 交通：市営地下鉄南北線北34条駅、市営地下鉄東豊線環状通東駅、新道東駅→中央バス→丘珠高校前バス停（約15～20分）→徒歩（約10分）
※都心（大通り）から車で約30分

【周辺の文化施設等】

- ・ モエレ沼公園：総面積170haの市内最大規模の総合公園
入園者数704,970人（平成24年度実績^{※15}）
- ・ 丘珠緑地：伏籠川の遊水地を活用した都市緑地
- ・ 丘珠空港緑地：緩衝機能、スポーツ空間機能、雨水調節機能を持つ都市緑地
- ・ 札幌コミュニティドーム「つどーむ」：全天候型の多目的施設
- ・ 丘珠獅子舞：札幌市指定無形文化財（昭和49年10月指定）

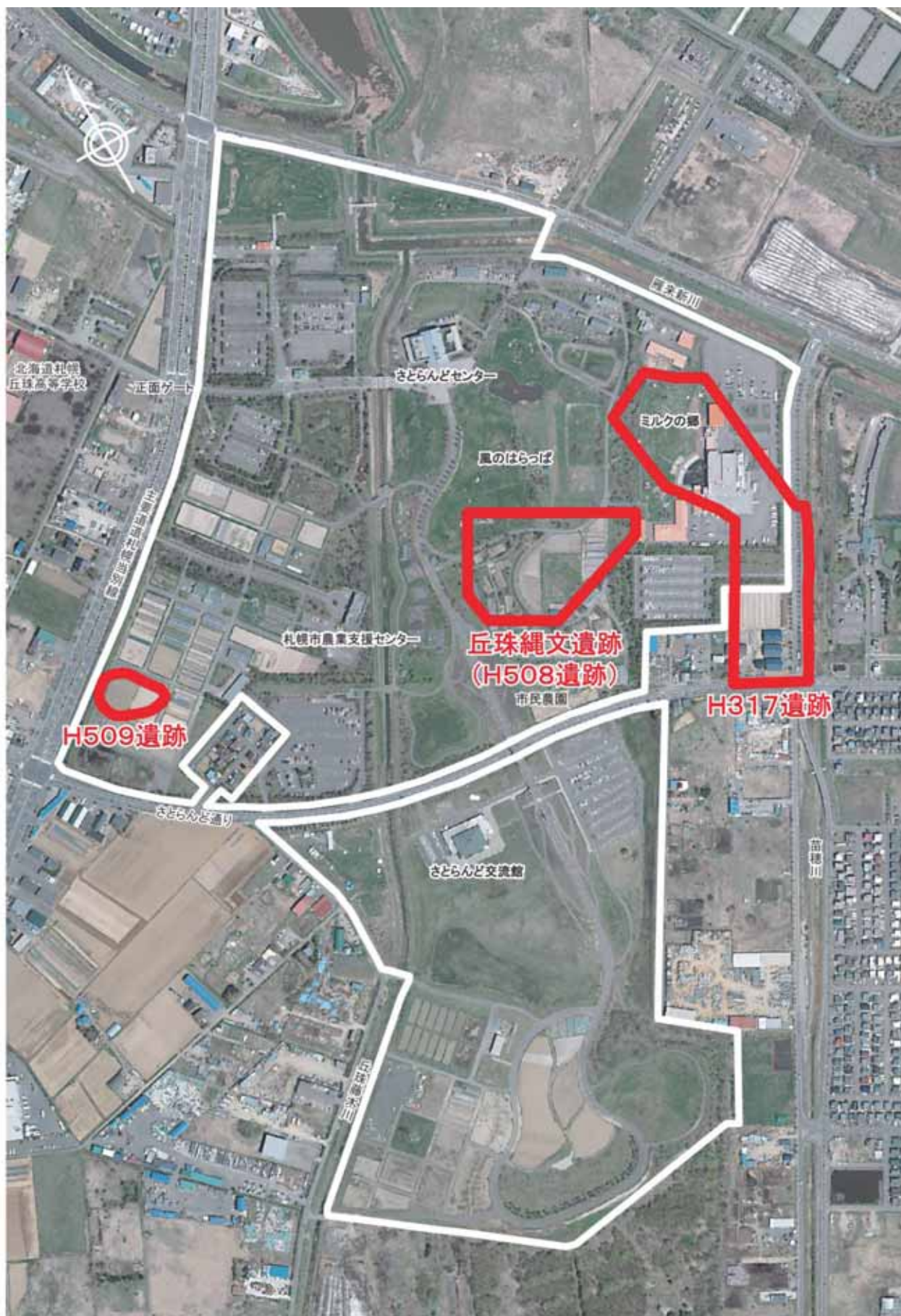
※15) 札幌市の主な観光施設利用者数の第4位（『平成25年度版 札幌の観光』平成25年10月）

※16) 札幌市の主な観光施設利用者数の第2位（『平成25年度版 札幌の観光』平成25年10月）

4 サッポロさとらんどの遺跡とその調査経緯

サッポロさとらんどでは、これまでの調査で3カ所の遺跡が見つかっています。

一つ目は、現在の「ミルクの郷」（サツラク農業協同組合牛乳工場）付近から見つかった擦文文化（約1000年前）と続縄文文化（約2000年前）の遺跡（H317遺跡）です。この遺跡からは、工場の建設に先立って平成4・5年に実施した発掘調査で、擦文文化の竪穴住居跡12軒や、続縄文文化の炉跡93カ所が発見され、当時の生活の様子が明らかになっています。遺跡は現地に残っていませんが、発掘調査で見つかった土器や石器は埋蔵文化財センターに収蔵し、その一部はさとらんどセンターに展示しています。なお、発掘調査の記録は報告書（『H317遺跡』札幌市文化財調査報告書46）としてまとめており、札幌市中央図書館で閲覧することができます。



第3図 「サッポロさとらんど」と遺跡の位置

S=1/8000

第2表 さとらんだの遺跡の沿革

年度	項目	概要
昭和49年3月	H317 遺跡登載	H317 遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登載される。
平成4年5月	「(仮称)札幌里づくり事業基本計画」策定	農業公園構想が具体化し、都市と農業の共存、人と自然とのふれあいをテーマとした事業計画が策定される。
平成4年6～7月	試掘調査 (さとらんどⅠ期工事範囲)	試掘調査の結果、H317 遺跡の範囲から擦文時代の遺構・遺物が発見される。
平成4年8～11月 平成5年5～10月	H317 遺跡発掘調査	発掘調査の結果、擦文時代の竪穴住居跡12軒、続縄文時代の炉跡93カ所などが検出される。
平成5年7月	試掘調査 (現H508 遺跡周囲)	現在の「風のはらっぱ」の南側付近(C・D地区：現H508 遺跡)から縄文時代晩期の土器・石器が発見され、約25,000㎡の範囲に縄文時代晩期の遺跡が広がることが確認される。
平成5年	H317 遺跡 C・D地区盛土保存	H317 遺跡C・D地区(現H508 遺跡)が、盛土により現状保存される。
平成6～7年	試掘調査 (さとらんどⅡ期工事範囲)	現在の農業支援センター圃場付近で、続縄文時代の遺物が発見され、盛土により現状保存される(現H509 遺跡)。
平成7年	「サッポロさとらんど」(第Ⅰ期エリア)オープン	「サッポロさとらんど」第Ⅰ期エリアの供用が開始される。
平成12年9月	H508 遺跡、H509 遺跡登載	H317 遺跡C・D地区が、H317 遺跡とは別の遺跡であるH508 遺跡として遺跡台帳に登載される。H509 遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登載される。
平成16年	「サッポロさとらんど」(第Ⅱ期エリア)オープン	「サッポロさとらんど」第Ⅱ期エリアの供用が開始される。

二つ目は、現在の「風のはらっぱ」の南側から見つかった縄文晩期（約 2300 年前）の遺跡（H508 遺跡：丘珠縄文遺跡）です。この遺跡からは、平成 4・5 年に実施した遺跡の有無を調べる予備的な調査（試掘調査）で、広い範囲から土器や石器が見つかっており、市内でも有数の広がりを持つ縄文文化の遺跡であることが明らかになっています。H508 遺跡は、上述したとおり、現在、盛土されて地下に保存されています。

三つ目は、現在の農業支援センターの圃場^{ほじょう}付近から見つかった続縄文文化（約 2000 年前）の小規模な遺跡（H509 遺跡）で、この遺跡も地下に現状のまま保存されています。

この 3 カ所の遺跡のうち、市内でも有数の広がりを持つ縄文文化の遺跡である H508 遺跡を活用して、遺跡公園を整備する事業が、「第 3 次札幌新まちづくり計画」に位置づけられ、平成 25 年度には、遺跡公園の整備に向けて、H508 遺跡の確認調査を実施しています。確認調査は、整備の具体的な内容を定める基本計画の策定に向けて、平成 26 年度も実施する予定です。

5 確認調査の方針と方法

（1）調査方針

H508 遺跡を活用した遺跡公園の整備に向けて、遺跡の具体的な内容を把握するための確認調査は、遺跡が沖積平野の低地部に所在することを踏まえ、次の方針のもと実施しました。

- ・遺跡全体を対象にトレンチ調査^{※17}を行い、地層の連続性を把握し、当時の地形や遺物^{ほうがんそう}包含層^{※18}の状態を確認します。
- ・遺構の有無を確認し、その内容・分布状況の把握に努め、確認した一部の遺構については、保存を前提とした部分的な調査を行い、動植物遺存体の回収等を通して、遺構の性格を把握します。

※17) トレンチ (trench) とは堀や溝のことで、考古学の発掘調査では、細長い溝を掘って行う調査を「トレンチ調査」と呼びます。

※18) 土器や石器等の遺物が出土する地層。

(2) 調査方法

確認調査は、平成25年6月24日～9月19日に実施しました。このうち、平成25年7月24日～8月11日に、市民ボランティアの参加のもと、集中的に作業を進めています。

確認調査では、まず、H508遺跡の試掘調査やH317遺跡の発掘調査の成果等から想定される埋没河川^{※19}の流路を踏まえ、トレンチ調査により微地形を把握する目的で、遺跡範囲の南辺をY軸方向の基線とするX軸とY軸とからなる発掘区を設定しました。X軸とY軸との関係は数学系座標と同様であり、発掘区方眼は10m×10mを基本単位とします^{※20}。

次に、発掘区方眼のX軸10区の西壁沿いに4カ所、X軸14区の西壁沿いに2カ所、Y軸09区の北壁沿いに4カ所、合計10カ所で幅2～3m程の調査区(調査区001～010)を設定し、さらに、発掘区方眼の軸線に沿って、調査区内に幅1mのトレンチを設定しました。

調査区の盛土を重機で除去した後、人力で自然堆積層の上面を精査し、トレンチを掘削しました。トレンチ掘削後、土層堆積状況の観察結果に基づき、出土した遺物は、層毎にトータルステーション^{※21}を用いて座標点を記録して取り上げました。検出した遺構は、炉跡(HE)、焼土粒集中(DB)、炭化物集中(DC)に分け、トータルステーションを用いて平面外形を記録後、一部の遺構について、部分的な土壌のサンプリングを行いました。炉跡の一部については、火床^{※22}上に堆積する土壌をサンプリングし、火床を検出した段階で調査を終了しています。

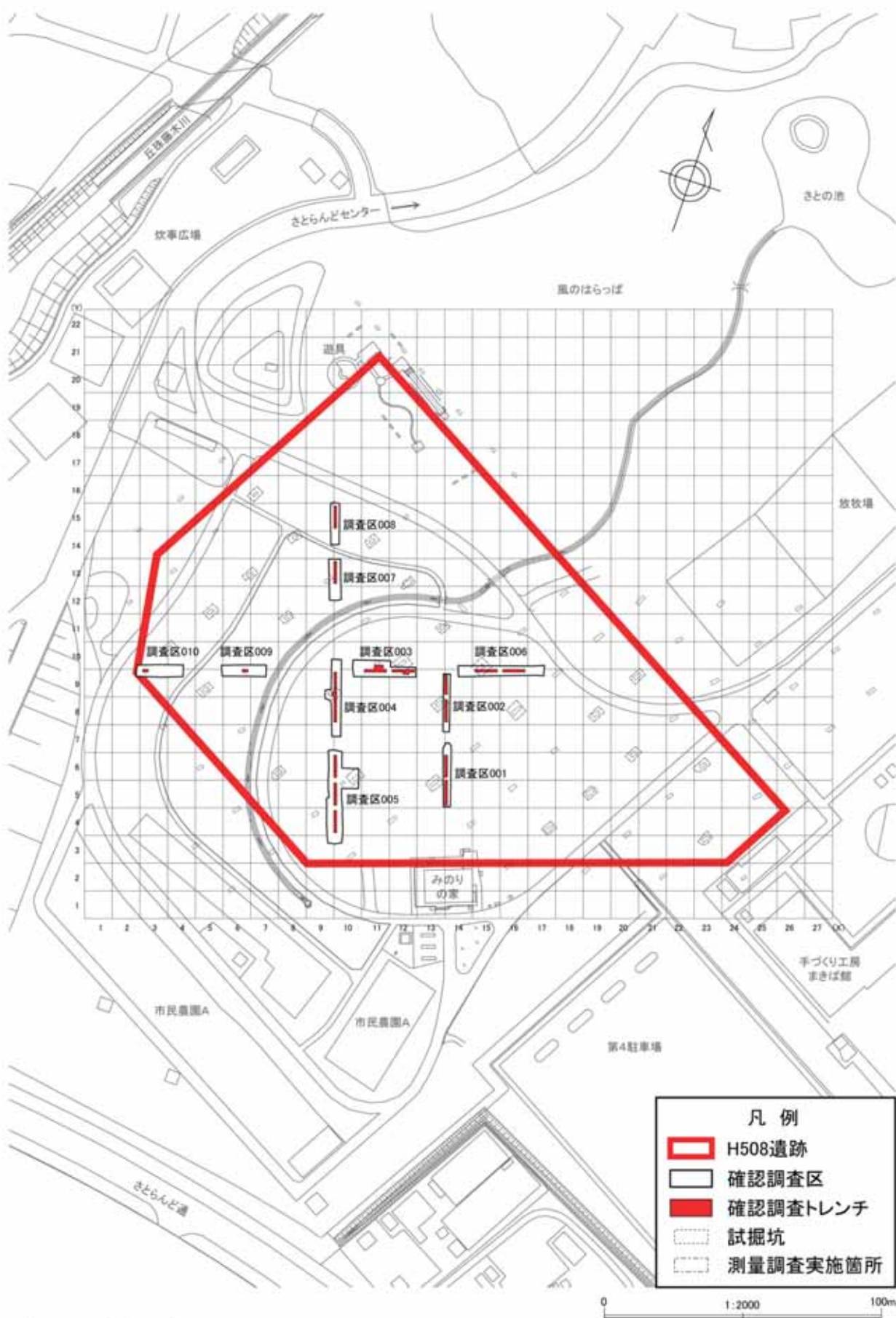
なお、遺構・遺物の分布が疎な範囲については、包含層を掘削し、下位の土層の確認を行いました。遺構・遺物の分布が密な範囲については、複数枚の包含層のうち、上部の包含層のみを調査して作業を終了しています。

※19) 土砂が堆積して埋まってしまった河川の跡。

※20) 発掘調査では、一般的に、遺跡全体に方眼紙をかぶせるように格子目の地割りを行って、発掘区を設定します。発掘区のひとつひとつの区画(発掘区方眼)は、数学のグラフと同じように横軸(X軸)の番号と縦軸(Y軸)の番号の組み合わせで呼称します。

※21) 距離と角度を同時に計測することができる測量機械で、一般的に狭い範囲での高精度な測量に利用されます。

※22) 「ひどこ」ないしは「かしょう」と読みます。火を焚いて地面が赤く焼けたところ。赤く焼けた土を「焼土」(しょうど)と呼びます。



第4図 確認調査区配置

6 丘珠縄文遺跡の概要

(1) 地層と地形

H508 遺跡を構成する土壌は、主に河川堆積物で、粘土、粘土質シルト、砂質シルト、細砂から構成されています。これらの自然堆積層のうち、確認調査では、連続して堆積する5枚の層から、土器や石器など縄文晩期の遺物が出土しました。また、5枚の包含層のうち、下位の3枚の包含層で、炉跡（HE）、焼土粒集中（DB）、炭化物集中（DC）を検出しました。

トレンチの土層断面を記録し、10カ所の調査区において縄文晩期の包含層の標高を比較した結果、調査区001、002、003、004、005（北端）、009が他の調査区よりも数十cm高いことが判明しました。また、調査区005の南端における細砂の堆積状況から、縄文晩期頃の河川の流路は、想定されたとおり、遺跡の南側に存在した可能性が高いことがわかりました。

したがって、縄文晩期には、調査区001、002、003、004、005（北端）、009を囲った範囲を中心に微高地が広がっていたものと考えられ、この微高地は、調査区の南側を流れていたと推測される当時の河川により形成された自然堤防の高まりに相当するものと考えられます。

(2) 遺構と遺物

遺構は、3枚の包含層から、炉跡（HE）19カ所、焼土粒集中（DB）8カ所、炭化物集中（DC）2カ所を検出しました。

遺物は、5枚の包含層から、座標点で合計2,900点強が出土しました。

これらの遺構と遺物は、調査区001、002、003、004、005から集中的に検出されており、その分布範囲は、上述した自然堤防の高まりと一致しています。

また、遺構から採取した土壌サンプルについて、フローテーション法^{※23}を用い選別した結果、現在までの作業で、黒曜石等の石器碎片やクルミ属内果皮片^{※24}といった微細遺物が比較的多く含まれ、その他にも、サケ科を主体とした魚骨片やチョウザメ科の鱗板片^{※25}、植物の種子等が含まれていることが判明しています。

なお、植物の種子としては、市内の縄文文化の遺跡ではじめてヒエ属の種子が発見されました。

※23) 浮遊選別法。土壌を水で溶き、比重の軽い遺物を浮遊させて回収する方法。

※24) 内果皮とは、果実の内部の種子を直接包んでいる部分のこと。クルミの硬い殻の部分。

※25) 鱗板とは、チョウザメ科の体の表面にみられる硬い鱗のこと。「硬鱗」（こうりん）とも呼びます。

(3) 遺跡の概要

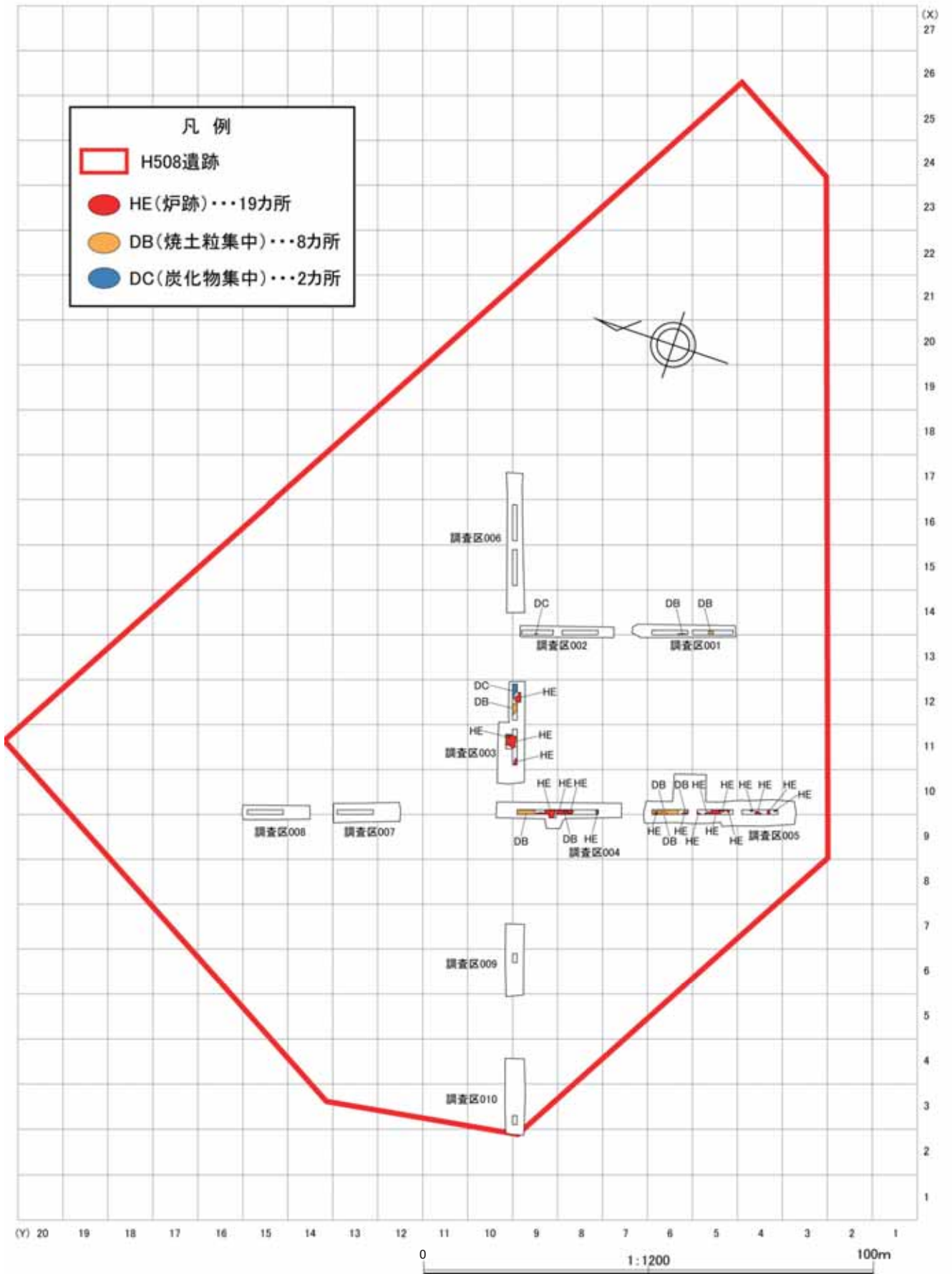
平成25年度の確認調査の結果、H508遺跡は、少なくとも5枚の包含層からなる縄文晩期の多層遺跡であり、遺跡内南半の中央付近に広がる自然堤防と考えられる地形の高まりに、炉跡等の遺構や土器・石器等の遺物が集中して分布していることがわかりました。

炉跡周囲の土壌には、石器の碎片、クルミ属内果皮片、サケ科を主体とした魚骨片やチョウザメ科の鱗板片、植物の種子等が含まれており、炉を中心とした生産活動の一端を確認することができました。市内の縄文文化の遺跡ではじめて見つかったヒエ属の種子は、近接するH317遺跡の続縄文文化初頭のヒエ属種子と合わせて、ヒエ属の栽培化や利用方法を検討する上で、たいへん貴重な資料と言えます。

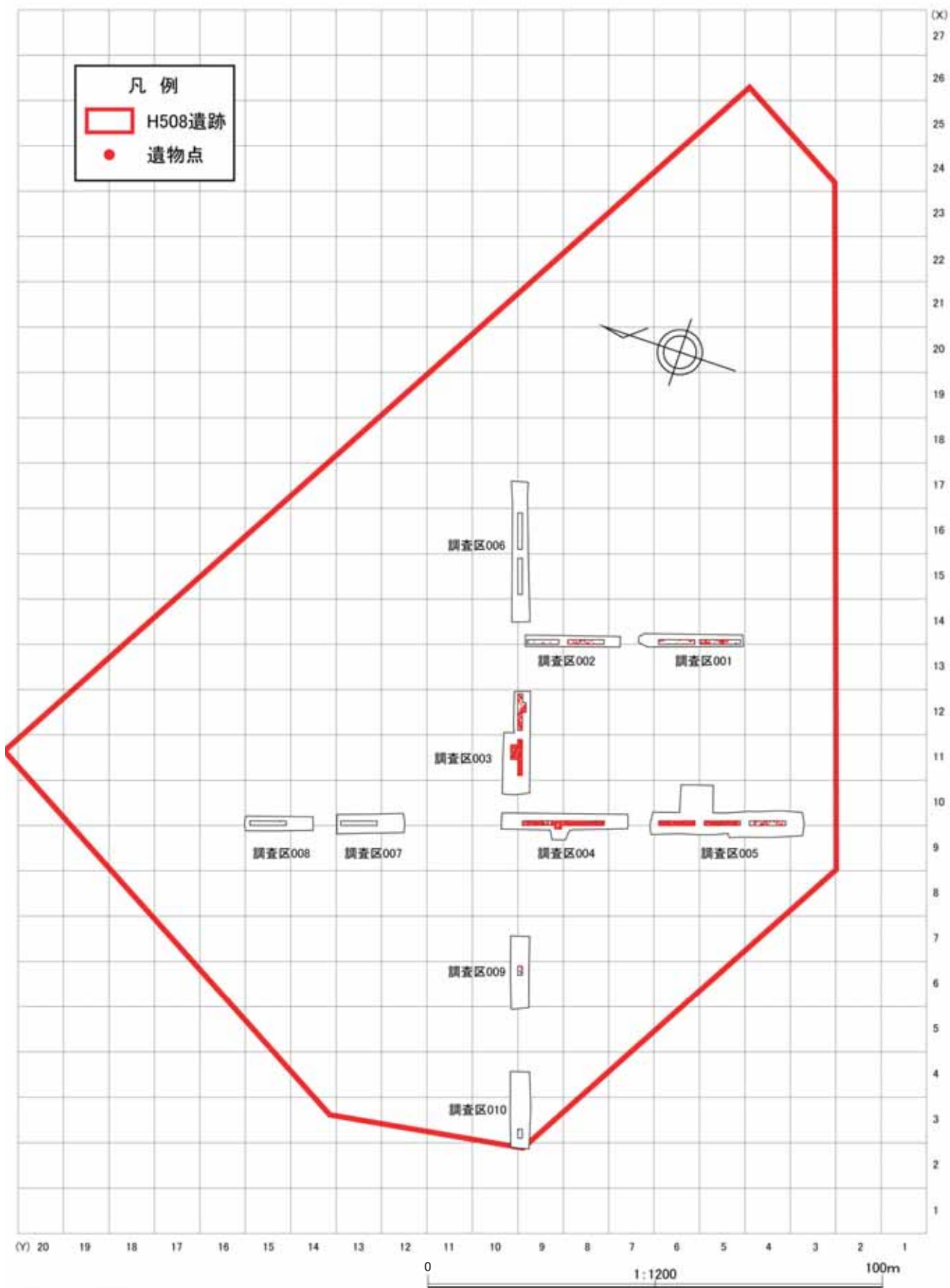
包含層が累積している状態から、H508遺跡は、季節的に集中する生業活動に伴い形成された遺跡と推測されます。

なお、現在も整理作業を進めているため、以上の概要は、平成25年度の調査成果に関する中間報告的な位置付けとなります。最終的には、平成26年度に確認調査を実施した上で、放射性炭素年代測定^{※26}の結果などを含めて、詳細な内容を報告する予定です。

※26) 最も普及している理化学的な年代測定法の一つで、自然界に存在する炭素同位体「炭素14」(^{14}C)が、放射線を出して崩壊し「窒素14」(^{14}N)に変化する半減期を利用して年代を測定する方法。



第5図 遺構配置



第6図 遺物分布



写真図版1 クルミ属内果皮片 (H508 遺跡焼土粒集中から回収)



写真図版2 ヒエ属種子 (H508 遺跡炉跡から回収)



調査区004遺物出土状況（南から）



調査区005遺物出土状況（北から）



調査区003炉跡調査状況（北から）



調査区004炉跡調査状況（東から）



調査区004一括土器出土状況（西から）



調査区003一括土器出土状況（西から）

写真図版3 確認調査実施状況